

idea

ニュースレター「アイデア」

2023. 8

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 熱気球パイロット(後編) 千田修一さん
- 3 | 団体紹介 | 千厩金管バンドクラブ
- 5 | 地域紹介 | 第20区自治会(室根)
- 7 | 企業紹介 | 株式会社ヒカリ(一関)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴⑦
改めて、新型コロナ5類移行後の地域づくり
- 9 | センターの自由研究 | 地名の謎 調査ファイルNo.8「興田と沖田」



今月の表紙

明治4年、鳥海村の村社と定められた「興田神社」。養老2年の勧請とされますが、「妙見山法眼寺」として仏教の妙見信仰と習合されていた歴史が長いようです。興田神社という社名も、神仏分離令(明治元年)により改称されたもので、それまでは「妙見社」と称されていました。さてこの「興田」という名称、現在は地名として存在していないことをご存知でしょうか？(自由研究)

発行 いちのせき市民活動センター 千021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel:0191-26-6400 Fax:0191-26-6415 ホームページ:https://www.center-i.org/ メール:center-i@tempo.onn.ne.jp
せんまやサテライト 千029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel:0191-48-3735 Fax:0191-48-3736

お知らせ

募集

「千厩金管バンドクラブ」メンバー募集中

本誌「団体紹介」でご紹介した千厩町の「千厩金管バンドクラブ」は、千厩町内の各種イベントのほか、アンサンブルコンテストにも参加しています。コンテストは小学生が対象ですが、その他の演奏の機会には保護者の参加も大歓迎！練習の見学も可能(要事前連絡)、楽器の貸出も行っています。詳しくは下記までお問合せください。

活動日・時間:

火・金曜日 18時30分～20時

活動場所:

<火曜日>千厩農村勤労福祉センター

<金曜日>一関市奥玉市民センター

問合せ:0191-56-2950

(一関市奥玉市民センター内)

情報

NPO法人奏楽のたね Facebookページ開設

一関市内で医療的ケアが必要な重症心身障がい児・者と、その家族等への理解促進や支援活動を目的に、重度訪問介護・居宅介護などの事業を行っている「特定非営利活動法人 奏楽のたね」では、令和5年2月よりFacebookページを開設し、同法人の活動の様子などを発信しています。詳しくはQRコードを読み込むか下記までお問合せください。



Facebookページ:

Facebook内の検索機能で「特定非営利活動法人 奏楽のたね」と検索

問合せ:0191-34-4243

募集

一関・平泉 黄金の国バルーンクラブ 会員募集中!

本誌「二言三言」でご紹介した千田修一さんも所属する「一関・平泉黄金の国バルーンクラブ」では、一緒に活動する仲間を募集しています。

一関・平泉地域を熱気球イベントで盛り上げることを目的に活動しており、主な活動は、「一関・平泉バルーンフェスティバル」や「熱気球教室」のサポート、「体験搭乗(係留)イベント」の開催などです。熱気球の知識や経験は不問。詳しくは下記まで。※入会は高校生以上。

年会費:

<個人> 3,000円

<法人・団体会員> 10,000円

問合せ:0191-21-8413

(一関市商工労働部観光物産課内)

情報

法人化のお知らせ (旧 いちのせき ニューツーリズム協議会)

2023年7月7日付けで、「いちのせきニューツーリズム協議会」が法人化し、「一般社団法人いちのせきニューツーリズム」となりました。

同法人は、地域資源を活かした教育旅行や着地型観光による交流人口の拡大、それらを通じた地域の活性化及び地域社会の維持発展の実現を図ることを目的に活動しています。

法人化後も教育旅行の受け入れを柱とし、着地型観光の推進を図っていきます。

法人名:一般社団法人

いちのせきニューツーリズム

法人登記日:2023年7月7日

会長:後藤定幸

問合せ:0191-82-3111

イベント

「曲田マルシェ」12月まで開催中

藤沢町黄海地域の曲田農園組合内の女性グループ「まがれっと倶楽部」が主催する「曲田マルシェ」が5月から開催されています。

地元の新鮮野菜の直売、手づくり雑貨の販売をメインに、洋服や日用品を販売するフリーマーケットなども開催します。詳しくは下記まで。

日程:2023年8月20日、9月17日、

10月15日、11月5日、12月3日

※いずれも日曜日

時間:9時30分～12時

場所:曲田地区ふれあいセンター

駐車場

(一関市藤沢町黄海字下曲田417-18)

問合せ:080-1696-5888(担当:藤)

募集

「第16回むかさり行列」花嫁・花婿募集中!

一関市巖美町の地域協働体「巖美しの里協議会」では2023年10月下旬に開催予定の「第16回むかさり行列」に出演する花嫁・花婿を募集しています。むかさり行列は1955年頃まで一関地方で行われていた花嫁道中を再現したもので、2003年に伝統的な行事の継承と地域活性化を目的に復活。詳しくは下記までお問合せください。

募集対象:一関市内在住の夫婦または婚約しているカップル

衣装代:自己負担。ただし、協議会から半額の補助(上限20万円)あり。

募集締切:2023年8月31日(木)

問合せ&申込:0191-29-2205

(一関市巖美市民センター内)

まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名 「とめくん・パークちゃんがお出迎え」



平成28年、気仙沼の被災者の方の声を受け、小澤文夫さんが自身の所有するりんご畑をパークゴルフ場として整備した「留パークゴルフ場(室根町折壁留)」。1日200円で利用可能(予約不要)です。小澤さん手作りのオブジェが「ウエルカム」な雰囲気を醸し出しています。



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	54125	-13	24559	15
花泉	11996	-4	4720	6
川崎	3225	-3	1280	2
千厩	9833	-4	4109	-2
大東	11875	-6	4908	4
東山	5869	-14	2274	-5
室根	4361	-9	1787	-1
藤沢	7084	-26	2777	-10
一関市全体	人口 108368	-79	世帯数 46414	9
	出生数 53	15		

2023年7月1日付 (2023年6月30日現在 住民基本台帳より) ※外国人登録者含む

173 / 108,368
千田 修一

「一関・平泉 黄金の國バルーンクラブ」会員(平成28年～市民ボランティアとして同会の活動に参加)であり、熱気球パイロット(熱気球操縦士技能証2220号)として「黄金の國一関・平泉号」の係留体験時の操縦も行う。昭和40年青森県生まれ。(株)明輝・神奈川工場に就職後、一関工場新設に伴い、当市に定住(現在は同工場加工技術課課長)。



第108回 熱気球パイロット 小岩俊彦【前編】 千田 修一【後編】 × いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

「非日常の光景」が身近にある一関へ ～市民パイロットの挑戦【後編】～

「黄金の國一関・平泉号」の存在により、当市では目にする機会が増えてきた熱気球。さらなる市民認知と、熱気球ファン獲得のため、熱気球パイロットのライセンス(熱気球操縦士技能証)を取得した市民が2人います。現状では金銭的負担も大きい中、当市の上空を熱気球で自由飛行すべく、挑戦を続ける2人に、挑戦を決めた背景や、熱気球の魅力・可能性について伺いました(2回シリーズの後編)

小野寺 千田さんは令和2年にライセンスを取得していますが、会の加入時からパイロットを目指していたんですか？

千田 はい。空を飛ぶものへの興味は小さい頃からあって、でもチャンスがないまま、50歳になり……。父親の介護で実家に通っていたある日、帰り道にパルーンフェスの競技飛行にたまたま遭遇したんです。空への興味から、甘い考えで「やってみたいな」と思っていたら、その年のうちに新聞で会員募集の記事を見かけて……。

小野寺 現役で仕事をしながら、よく飛び込みましたね(笑)

千田 定年後に興味もなく家にずっといた父親を見て、同じように30年間仕事しかしていない自分に「このままじゃいかん」と思っていたんです。あとは「何でたまにしか飛ばないんだろ。もっと飛ばせば良いのに」という素朴な疑問がたくさん

あったので、関わってみたいという気持ちが大きかったですね。小野寺 定年後を見据えて、趣味を作るといふ狙いですか。でも正直、ライセンス取得に係る金額は趣味の域を超えていますよね(笑)

千田 私や小岩さんのように地元で訓練をせず、渡良瀬などで訓練や講習会とセットになった試験だと、多額の費用がかかります。ただ、多くのクラブにはインストラクターがいて、クラブ内で教え合えるので、訓練で使用するガス代等、正味数万円で取れちゃうんですよ。

小野寺 なるほど。現状はクラブ内にインストラクターがいないので、費用がかさんだ、と。

千田 そう、なので、私の次の責務はインストラクターになって、パイロットを育成すること。インストラクターになれば、会の若い世代に指導することができ

千田 いや、雪原と周りの山とのコントラストが相まった時にはたまらないですよ。それに熱気球が降下し始めると、雪が下から上に降っているように見えたり、幻想的で、大好きです。

小野寺 それは搭乗してみないと味わえない光景ですね！

千田 一関は着陸地への課題はありますが、冬は風がないことで、狭くても何とか着陸できまして、そういう勘所が掴めてきたので、ようやく他地域のパイロットにも推奨できます。

小野寺 冬の閑散期に、熱気球が上手くさされれば面白いですね。

千田 実は当会に熱気球を購入してくれた企業さんがいまして。係留体験や自由飛行で使い込んで欲しい、と。なのでこの冬からは一関の上空を、その機体で飛ぶ予定にしています。

小野寺 スポンサーですわね！それはすごい。

千田 今の子どもたちが中央に出た時、自分の田舎を自慢して

欲しいし、自慢できる街でありたいとずっと思っています。「うちの田舎、冬になると熱気球が飛ぶんだぜ、すげーべー」って。自分がそういうお国自慢ができなかったので、なおさら。

小野寺 市民にも「冬は熱気球は千田さん」という認識が根付いたら、いつか競技に出た時に盛り上がりそうです。

千田 一関で大会があるのに、一関のパイロットが出ないのは寂しいですし、いつかは競技にも挑戦したいですね。

小野寺 熱気球に関する法整備の動きもあるようですし、熱気球の注目は増しそうです。

千田 熱気球は航空機扱いとなってしまうべきなんです。他の航空機のように細かなフライト計画は作れません。決まった方向、時間、高さでの飛行はできない。それに、これまで各地域で築いてきたフライトエリアがあるのを、それを尊重するような法整備であって欲しいと願っています。ぜひみなさんにもご理解をいただきたいです。

小野寺 未来のパイロットにとつてはありがたい限りですし、一関にパイロット養成の土台を築いたレジェンドとして語り継がないといけませんね(笑)

千田 そもそも、自由飛行がしたくてパイロットを目指したので、お金と時間が許す限りは一関の上空を飛びたいんです。できるだけ一関の上空を飛び、みんなに興味を持ってもらうというのも、私の役目だと思ってるので。今まで誰も大会期間以外に一関の上空を自由飛行していません。

千田 一関は中規模の平野は至るところにあります。広大な平野は少ないですよ。熱気球はハンドルもブレーキもないので、広い所がないと着陸できません。なので他地域のパイロットにも「ちよつとここは難しいよ」と尻込みされるくらい、簡単ではないエリアです。

小野寺 熱気球のメッカには向かないということですか？

千田 それも、冬はいけるんですよ(笑)一関の冬は吹雪で雪が積もって風が強い。熱気球が盛んな秋田県の横手市は積雪が多く、機体を回収に行く車が着陸地点に到達できないので、冬は飛ばせません。

小野寺 でも熱気球の醍醐味って、パノラマの景色だと思わんですが、冬だと面白くないイメージが……。

※5 熱気球の扱いは世界各国で異なる。日本の「航空法」で定義される「航空機」に熱気球は含まれておらず、現状は「浮遊物」という扱い。
※6 例えば30年以上自由飛行が行われている宮城県北エリアでは「伊豆沼の周囲は高さ〇m以上で飛びましょう」「〇〇のエリアは野鳥の会のみなさんが活動しているので、避けましょう」など、地域の環境や活動、暮らしと共存するために構築してきた約束ごとがあり、それらを踏まえた熱気球の飛行が可能な領域(ローカルルール)

※1 前号参照 / ※2 小岩俊彦さん。前号参照 / ※3 「Honda Cars 奥州」。
※4 平成30年、熱気球の競技大会が開催されている地域から選出されている議員が中心となり「超党派スカイスポーツ推進議員連盟」が発足。熱気球だけでなく、パラグライダー、ハンググライダー、模型飛行機など様々なスカイ競技の航空法上の定義等について、検討を行っている。

団体紹介

千厩金管バンドクラブ

昭和62年「奥玉小学校金管バンドクラブ」として活動開始。平成30年、新千厩小学校の誕生により、名称変更。毎週火曜、金曜日の18時30分～20時が定例練習日。現在奏者は1名のみ(会員募集中/小学1年生から入会可)。

※問合せは一関市奥玉市民センターへ
TEL: 0191-56-2950

写真: 東北大会での演奏の様子(令和5年2月)



地域を盛り上げ、地域に支えられ

音楽活動の種をまく

令和5年1月、多くの注目をあびた千厩金管バンドクラブ。「第43回岩手県アンサンブルコンテスト」のトランペット三重奏で金賞に輝き、2月には「第50回東北アンサンブルコンテスト」に進出！多くの住民を感動させました。しかし、3月に6年生2人が卒業し、現在は奏者が1名のみ。唯一の奏者である小学5年生の武者愛結さんは「吹くことが難しいと思っている人も多いと思う」と前置きしつつも「練習を重ねて音が出た時の感動は何物にもかえることができないう感動がある」と活動の魅力を語ります。

昨年卒業したお姉さんの影響で同会に参加した愛結さん。最初は打楽器などで音楽に親しみ、徐々にトランペットの練習を開始しました。東北大会で同世代の演奏を聴き刺激をもらったと言いつつ、「今は一人だけど、みんなに聞いてもらいたい」と、楽しんでもらいたいと。

千厩金管バンドクラブ

練習を重ねて臨んだ東北大会の舞台へ思いを募らせました。来年度は妹が入会予定のため、2人で演奏する日が楽しみなのだとか。

愛結さんの母親で、同会代表の武者友美さんは「金管というハードルが高いと思われるので、ぜひ一度練習や演奏を見に来て、体験してほしい」と、会員募集への熱い想いを語ります。

定例の練習日には、リズムに合わせて楽器を演奏したり、音楽の楽しさを体験することに主眼を置くことで、小学生に音楽の楽しさや魅力を伝える役割を担っています。

知られざる同会結成につながるヒストリー

同会の前身は「奥玉小学校金管バンドクラブ」。昭和62年、奥玉小学校の校舎改築にあたり、奥玉地域住民から寄付を受け付けました。その寄付金の残金で金管楽器を購入したことが、全ての始まり

です。

当時、野球を筆頭に、スポーツ少年団活動が盛んで、多くの子どもたちがスポーツ活動を行っていました。そんな中、千厩中学校のブラスバンド部が部員の減少により休部になることが決定。同クラブは設立以来、地域でも積極的に演奏を行い、音楽の楽しさを伝えながら、地域の活気を創る存在として期待され、貢献してきました。そのため、「地域の文化活動が下火になってしまわないか」という危惧が。そこで浮上したのが、奥玉小学校改築のために集まった寄付金の残金で楽器を購入し、奥玉小学校で金管演奏に取り組むという案。金管楽器は小学生には難しいという声もありましたが、当時盛んだった野球等の屋外スポーツは、雨天時の活動ができないなどの課題があり、天候に左右されずに練習が可能な文化活動として、小学5・6年生を対象とした金管バンドをクラブ化しようという運びに。

小学5・6年生全員(当時28人)に行き渡るように楽器を購入し、金管バンドクラブが結成されると、音楽の時間などでも金管楽器が使用されるようになり、奥玉地域の子どもたちにとって金管楽器が身近なものとなったのです。当時はコンクールなどには出場せず、

「どんな子も楽しめる音楽」をモットーに、スポーツ活動の応援などでも演奏し、選手を元気づけました。

また、地域の人々のサポートを受けながら、定期演奏会も開催。そのほか、地域イベントなど、様々な演奏依頼もあり、本格的なステージでのパフォーマンスも経験した子どもたちは、自信をつけ、成長していきます。

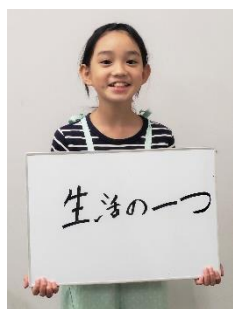
仲間と演奏できる幸せを感じながら

現在はたった1名での活動ですが、毎週土曜日に室根中学校の吹奏楽部と合同の練習会を実施。「単独での大会参加は難しくなりましたが、他団体のご厚意により、一緒に演奏できています。東北大会を経て大きく成長することができたので、この火を絶やさないようにしていきたい。地域にお世話になっているので、地域の人にも演奏を聴いてもらいたい」と、連携・応援してくれる各種関係者への感謝の気持ちも忘れません。

少人数のバンド編成は、各奏者の音色やパートが明瞭かつ鮮明に聞こえ、透明感のあるサウンドを生み出します。アンサンブルコンテストで結果を出してきたことは、子どもたちの努力や成

Q.あなたにとって「金管バンド」とは？

唯一の奏者



A. 生活の一つ

むしゃ まゆ 武者愛結さん

千厩小学校の5年生。東北大会に出て、自分の音楽について考えるように。来年1年生になる妹の入団を心待ちにしています。

代表



A. 繋ぐもの♪

むしゃ ともみ 武者友美さん

愛結さんの母。自身も吹奏楽経験者で、「やる時はまじめに、楽しむときは楽しむ」がモットー。メリハリをもった練習を心がけています。

長の証であり、音楽的なスキルを身に付けるだけでなく、「地域との連携の大切さ」をも学ぶ場として、同会の役割はこれからの時代こそ必要なものかもしれません。

- Photo gallery -



地域への応援を受けて
一関市奥玉市民センターに掲示されている同会の活動の様子を紹介するコーナー。奥玉振興協議会は応援を続けています。



思い出の詰まった楽器
「奥玉小学校平成19年購入」というシールが張られた楽器。奥玉小学校閉校後は、同会が楽器を管理しています。



定例練習
毎週火曜日は千厩農村労働福祉センターで、金曜日は一関市奥玉市民センターで練習中。楽器の貸し出しも行っています。



東北大会出場メンバー
同会史上初の快挙となった東北大会出場。卒業した2人は今も千厩中学校の吹奏楽で音楽活動を続けています。

地域紹介

第20区自治会

行政区は室根20区で、上千代ヶ原、下千代ヶ原、横沢川の3小字からなる。33世帯(現住世帯29/6班体制)、約80人が暮らし、6部会制(総務、産業、環境衛生、福祉、女性、文化体育)。「千代ヶ原」の由来は不明とされているが、仙台藩に金等を納めていた歴史があり、「仙台」の旧字「先代」に由来する可能性も。



左の写真：会館の屋根補修作業の様子(令和2年)

人・土地・暮らしに関心を持ち合って

金鉱山を由来とする2つの小さな集落

宮城県気仙沼市本吉町との県境に位置し、住民の7割以上が本吉町を生活圏としている室根第20区自治会。集落内には現当主で19代目の家や、製鉄業で財を成した祖先がいる家もあり、集落のルーツは金鉱山や製鉄(焔屋)関係にあるのではないかと推測されます。

中でも通称「中之倉」と呼ばれる横沢川(小字名)には、坑道跡が複数残り、その通称の由来も仙台藩中之倉に金を納めたことによるのだとか。その他、たたら製鉄の名残がある家も。

この中之倉と、上・下からなる千代ヶ原とで大きく分かれる同集落ですが、その距離は3km以上。

「共に集落活動を行う上で、この距離は今までもこれからも一つの課題」と、自治会長の三浦正勝さんは集落運営の難しさを述べて、「それでもみなさん協力的です。みんなで協力し合わないと地域機能が維持できないということが本

第20区自治会

室根

能的にわかってるんですよ」と微笑みます。そんな三浦さんが自治会長就任後に発行し始めた「自治会かわら版」には、集落住民のルーツや金鉱の歴史、屋号の紹介など、集落に関するコラム欄が充実しており、中之倉・千代ヶ原ともにバランス良くピックアップ。地理的な隔たりを埋め、互いに関心を持ち合うための一助となっています。

各種団体の連携で「生きがい」をつくる

同集落に待望の会館(千代ヶ原地区会館/中之倉集会所)が建設されたのは昭和55年。その数年後に自治会が結成されました。

自治会は当時の室根村が推奨していた部会制をとり、6部会制ですが、既存組織を包含するような組織体制のため、実際の活動は集落内の各種団体が連携し合って事業を実施しています。

自治会発足当初から現在まで続けているのが「20区収穫祭」。11

ります。

「地域見守り活動」として、共助活動の推進にも取り組み始めた同自治会。各種交流で築いてきた「顔の見える関係性」を基盤に、「千代に八千代に」歴史・未来を紡いでいきます。

月中旬に開催される同自治会のメイン行事で、農家組合と共催です。集落住民が自慢の農産物を出品し、審査員(JAに依頼)による審査で各種賞が選ばれるのですが、サツマイモが課題作品に設定されているのが同自治会の特徴。毎年全戸にサツマイモ苗を10本ずつ配布するため、多くの世帯が出品します。課題のサツマイモのほか、大根、白菜、里芋、キャベツ、ニンニク等々、様々な農産物が出品され、審査後は即売会を実施。副自治会長の三浦稔さんは「約100点が並びますが、全部売り切れちゃいます。収穫祭は本当に面白いですよ」と、ニコリ。90代の方も出品していると言つので驚きです。

ニーズに寄り添い、参加しやすい仕組みを

課題作品には「チャンピオン」という賞が設けられ、中山間組織から副賞として手打ちの鍬が贈られるなど、住民の励みとして定着しています。

同様に、地域生活の励みと言えるのが「おさなぶり会」や「新年会」、そして県道草刈りの受託費を積み立てて実施する「お出かけ」です。集落内に有志で結成する旅行グループがあるほど「お出かけ」が大好きな同自治会の

みなさん。新年会やおさなぶり会は気仙沼市や県内の温泉施設が多い一方、約7kmを受託する県道草刈りのご褒美は、2年に一度の泊旅行！10年以上続けています。

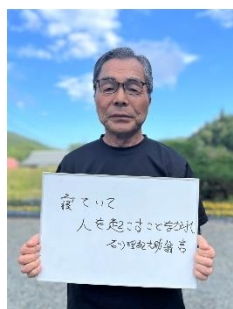
令和3年には「第20区ふれあいサロン」を開設。年4〜6回の自主活動に加え、自治会等との事業連携を行います。特筆すべきは男性会員の多さ。自治会役員を引退した世代が入りやすい体制・内容にしたことで、20人以上の登録者で、移動教室や料理教室、健康講座など、毎回異なるメニューを楽しんでいます。

令和4年にも新規事業として「3R運動」を開始。千代ヶ原会館の敷地内と、中之倉住民の私有地の2か所に集積所を設置し、環境保全効果と自主財源の確保を目指して空き缶回収に取り組み始めました。

年々人口は減り、空き家問題も抱える同集落ですが、お盆時期には「20区夏祭り」を開催するほか、津谷川地区体育協会主催の「津谷川地区野球大会」にも参加し、帰省者との交流機会を持ち続けてきたことで、Uターン者もいます。4年前にUターンした稔さんもその一人で、「盆・正月等に帰って来ては交流していたので、すんなりと自治会活動に参加できた」と振り返

Q.集落の自慢は何ですか？

自治会長

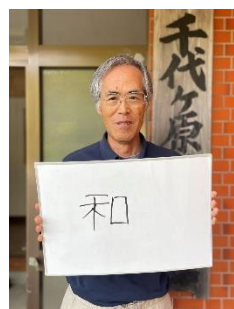


A. 寝ていて人を起こすことなかれ

みうら まさかつ
三浦 正勝さん

2期3年目。行政職員時代にも自治会活動には携わり続け、現在には自治会連絡協議会の会長として「室根まちづくり協議会」の副会長も担っています。

自治会副会長



A. 和

みうら みのる
三浦 稔さん

1期1年目。4年前にUターンし、総務部長を経て現職へ。「第20区ふれあいサロン会」の副会長も兼務しています。

- Photo



長い花壇で彩りを一度途絶えた花壇整備も令和3年度から復活。住民有志が苗づくりから行い、サロン会員などと協力して定植しました。



男女の隔てなく令和3年に開始したサロン活動。今年は集落に嫁いだ中国出身の方を講師に餃子作りにも挑戦予定(写真はそば打ち教室)。

gallery -



約40年続く「収穫祭」励みにしている人も多いため、コロナ禍でも開催を続けた収穫祭(食事は自粛)。入賞者は表彰し、自治会報でも紹介します。



つつかの棲む里平成5年から8年頃まで、集落内を流れる津谷川の清流化に挑戦。若者中心に「つつか(カジカ)」の保護活動を行いました。

一関 株式会社ヒカリ

面談を通じた外国人労働者の不安解消や外国人労働者の日常支援、外国人労働者同士や企業との交流会の開催など、「外国人労働者支援事業」のほか、「有料職業紹介事業(市や企業との情報交換、企業が求める人材の把握・ヒアリング、求人票作成、通訳支援など)」、製造業(エンジニアの直接雇用)を手掛ける「株式会社ヒカリ」は令和元年に起業。

企業名の「ヒカリ」には、起業と共に誕生した第一子の「クアン=光(中国漢字名)」と、「光り、輝く、(道を)照らし出す、いつでも明るく」という労働者への願いが掛け合わされており、企業とベトナム人それぞれの不安解消と人材育成の「かけはし」を目指しています。

企業と外国人労働者が「信頼し合える」サポートを

自身の経験を生かして

外国人雇用は、①技能実習生、②外国人特定技能、③留学生、④技術・人文知識・国際業務、⑤身分に基づいた残留資格(永住、定住、日本人配偶者等)の5つに大分され、このうち、②と④に関する受け入れ(企業・労働者双方)と、実習生の生活面(住まい、通院、契約等)を含めた総合支援を行うのが「株式会社ヒカリ」です。

代表取締役ベトナム出身のグエンコンフィンさんも平成23年に技能実習生として来日。留学生として日本に残留すると、学んだ知識を自国貢献すべく一時帰国したものの、平成28年から技能実習生監理団体組合(兵庫県神戸市)の職員となり、東北エリア担当として一関市をメインに制度を活用する企業や実習生の総合支援にあたってきました。

「日本企業と実習生(以下、労働者)のちよつとした困りごとや不安」にも対応してきたフィンさんは、組合職員として月数回の来県支援をしながら「もつと身近で一人一人に寄り添った支援ができないか」と模索し始めます。

当時、当市は東北エリアで最も労働

働者が多く、「受け入れの機運はあるものの、企業としてはまだまだ外国人労働者採用への不安が。特に日本語での日常コミュニケーション。企業によっては専門用語も多く飛び交い、理解不足により挫折する場面も少なからずあった」と振り返り、「ちよつとしたすれ違いから孤独へとつながり、労働者は不安を募らせ

る場合があります」と続けます。この現状を自身の経験に置き換え、「本来自分が思い描いた使命」の具現化として、当市内に「外国人労働者支援事業」を起業したのです。

大事なのは企業配属後のきめ細やかなアフターケア

企業が求めるのは「日本語をある程度理解でき、継続して勤務することが出来る人材」。会社に配属されるのがゴールではなく、「配属後のアフターケアが最も大切」とフィンさん。言葉や文化の壁がトラブ

理解には正確な通訳を必要とする場合もある」とその二一を語り、起業した直後にコロナ禍となり、急務とされたのが、病気などへの対応。組合を通ず雇用の場合、緊急対応が難しいのに対し、同社はすぐに対応が可能なため、企業も労働者も安心感を得ることができました。

また、労働者と雇用先との意見交換の場や、外国人労働者同士が課題を共有し合う場など、「交流」の機会を設けることにも尽力。市の国際交流協会と連携し、多国籍の交流の場に発展したこともあります。

現在、当市在住の約700人の外国人労働者の内、同社が支援しているのはベトナム人40名。「労働者不足は大きな課題。外国人労働者と企業が信頼し合い、『一緒に働く』ことが当たり前の世の中になっていく。言語も文化も、良い部分を尊重しながら働ける環境づくりを進めていきたい」と、今後も労働者と企業双方に「光」を届けます。



- 代表取締役 NGUYEN CONG HUYNH さん。国際交流に通じるイベントなどにも参加(令和4年度)。
- 定期的に開催する企業と労働者の面談(直接意見交換を行う場)。

DATA
〒021-0041
一関市赤松字亀田172番地1
TEL 0191-48-4531
FAX 0191-48-4532

今月のテーマ

地域運営の落とし穴①③
改めて、新型コロナ
5類移行後の地域づくり



第53話

‘振り返りチャンス期間’を振り返り、‘原点’を振り返る。

新型コロナウイルス感染症が、令和5年5月8日から感染症法上の「5類感染症」に位置付けされ、概ねこれまでの日常生活が戻ってきました。もちろん感染症が収束した訳ではないので、引き続き基本的な感染対策は講じていくのですが、その判断は個人に委ねられ、事業をする側としては、感染対策に関する各種負担が軽減されました。

これまでは自粛されていた懇親行事も堂々とできるようになり、まちや社会の雰囲気は、明るくなったように感じます。一関市では、5月27日に「TGC teen ICHINOSEKI 2023」及び「TGC teen ICHINOSEKI FES 2023(屋外イベント)」が開催され、チケット来場者3600人、屋外イベント来場者11000人と、5類移行後すぐの大規模イベントは、たくさんの笑顔で輝いていました(準備期間の半年間は、大変でしたが……)。

社会が明るくなった半面、「コロナ禍の3年間について『振り返り』をしたか?」という疑問も。5類に移行したことで、できることが増えた(正確には、元に戻った)半面、いままで負担だと感じていた会議や事業が復活するということにもなり、不満の声が出てくる可能性も。また、コロナ禍の3年間で何もできなかった=未経験の3年間は、**‘経験者を生まなかつた3年間’**でもあり、経験者も3歳、年を重ねているということです。afterコロナで‘何でもできるようになった’と思いきや、‘やりたくてもやれない状況になった’という面もあるのです。

コロナ禍で動けない時期だからこそ、withコロナやafterコロナに備えて、「見直し」をするチャンスがあったにも関わらず、「見直し」を行わなかった地域や団体の方もいるのでは?(本誌2021年3月号「博識社のフクロウ博士第24話「コロナ禍における地域運営」参照)

5月の総会シーズンから地域を見ていると、今年度の事業数はここ3年よりも増えています。事業を増やしたと言うよりも、中止にしていたものを再開しただけだったりしますが、なぜか「本当にやれるのか?」と不安視する声も……。それは、上述したように、**‘未経験者の増加’**と**‘経験者の高齢化’**が背景です。たった3年ですが、その代償は大きいのです。

よって、事業として計画はするものの、‘無理をしない程度にやる’という状況判断を取りながら、事業を実施するという地域・団体も多いようです(もちろん「afterコロナの様子見」という側面もあります)。

夏祭りや秋祭りなど、イベントシーズンに突入していますが、「祭り」は、「**地域文化の継承と交流を生む機会**」であることから、実は重要な役割を担っています。ぜひ頑張っていたいただきたいのですが、その代わりに、**人が多かった時代に創った事業(内容)も多いことから、同時進行で「見直し作業」を行うことをオススメします。**

「見直し」のススメについては過去に何度か掲載していますが、**‘負担’を中心に考えて見直すのではなく、‘必要性’を中心に考えなければいけません。**大変だから……という言葉は沢山聞きますが、「**始まった経緯**」や「**目的**」を忘れていた場合も多々あります。負担があることは否めませんが、「目的」を知ってみると、無くしてはいけないことだと気づいたり、「**やり方・仕組み**」を変えることで現代風になったり、改善策はあります。

地域にある「役」や「行事(事業)」は、過去の先輩たちが、「**地域の支え合い**」のために生み出したものであり、「よく考えられているなあ」と感心させられることがあります。無くしてしまえば、その恩恵や意味が分からないようなものも多いですが、単純に無くしてしまえば、住民や行政との関係が希薄になる可能性が高く、「自治」とは言えません。

「会議」も同様に、コロナ禍で、「開催しなくても問題のない会議」と「どんな状況下でも必要な会議」の明暗が分かれたように感じています。改めて会議開催の「目的」や「進め方」を考え、**限りある資源(時間・人)の無駄遣いを避けましょう。**

すべては、**‘安心して安全に暮らし続けるため’**なのです。

北上山流域の某地区で、コロナ禍に開催された「有事の際の各組織の動き」を見直すワークショップ。築堤で水害等が減り、自衛組織の役割が不明確になりつつありましたが、整理していくと「災害が減ったからこそ、平常時の活動に意味がある」という気づきに。コロナ禍を有効に使い、

「興田」と「沖田」の関係性を深掘りしてみた

「興田」「沖田」それぞれの歴史を辿っていくと、「沖田」に該当する「築館村」「天狗田村」に関しては、明治～現在までに4回もの合併が行われています。それらを踏まえると「興田」を地名から失くせざるを得なかった背景が見えてきました。
※あくまでも憶測。関係機関にもヒアリングしましたが、正式な記録などはなく、正解は不明です。



【使い分けの基本 (例外あり)】

沖田=53の小字を束ねた大字名 (具体的かつ現存する地名・住所)
興田=旧興田村(沖田含む)村域であり、共助(地域コミュニティ)母体

現在、地名として存在するのは「沖田」で、ゼンリン地図を見ると大字沖田には53の小字が存在。この53小字の地名や、大字沖田をピンポイントで指す標識や構造物(橋など)には「沖田」の字が使われます。

また、旧興田村域には、現在21行政区・18自治会が存在しますが、これらの帰属先は「興田」というコミュニティであり、「興田地区振興会」のように、旧興田村エリアを包括する組織名には「興田」が使われます。

「興田神社」「興田川」のように、「興田保」時代に通じるような歴史あるものにも「興田」が使用されています。※興田神社は鳥海村エリア。

大東地域の各市民センターに使い分けについてヒアリングしたところ、やはり上記のような使い分けをしているようです(むしろ興田市民センター以外は「沖田」を使うことは少ないので、使い分けを意識することもあまりない)。ちなみに、明治34年に八日町(沖田地内)に開局した「沖田郵便局」が大正4年に「興田郵便局」に改称されるなど、沖田/興田を巡る物語は、各方面にありそうです(笑)

写真左下標識の「興田」が指すのは、旧興田村エリア全般であり、右下の標識に書かれた「沖田」は、大字沖田への道という意味だね。

約80年間で4回の合併! その流れと背景

旧興田村に関する歴史	風土記等記載の家数(水呑百姓含め) ▼関連法など	中川村 248戸 (安永風土記)	鳥海村 173戸 (封内風土記)	築館村 154戸 (安永風土記)	天狗田村 64戸 (安永風土記)	明治初頭はまだ自然発生的町村であり、県域はおろか、村域も明確ではなかった
4	廃藩置県	11月に「一関県」誕生、直後(12月)に「水沢県」へ(同8年11月には「磐井県」に)。				
	「戸籍法」制定	自然発生的町村の区域とは別に、戸籍事務の便宜に従った行政区画が定められる。				
6	「地租改正法」交付	土地の所有権を公認し、課税するもの。明治8年～14年頃まで本格的に進められる。				
8	水沢県による村落統合	水沢県では村ごとに小地名を整理し「字地」を決めた。				合併 →「沖田村」誕生
22	「市制・町村制」施行	合併→「興田村」誕生 (1500~1600人規模の村が中川、鳥海、沖田は「大字」へ 4800人弱の村へ)				地租改正の際、境界が不明(入会地など)で、田畑・山林が入り混じっている村は合併しても良いと指示が出た府県もあったらしく、水沢県でも同様だったのではないかと推測。
27	「地方自治法」改正	地方公共団体(市町村)の規模の適正化に関する規定が設けられる				
28	「町村合併促進法」施行 ※3年間の限時法	戦後の地方自治の強化が目的。				
30	大東町で「行政区設置条例」議決	大原6→20、摺沢5→20(現在は21)、興田7→18(現在は21)、猿沢4→13、渋民4→13へ				1町村300~500戸が基準とされ、単村では達しなかったため、合併したものと推測。※この時、曾慶村と渋民村も合併し「渋民村」が誕生。曾慶、渋民は「大字」へ。
16	いわゆる合併三法成立					
17		一関市と合併				

この時、旧村名が大字(大東町○○)になったのは大原、摺沢、猿沢、渋民村と興田村は、各村の大字(渋民村=渋民、曾慶、興田村=沖田・中川・鳥海)を継承したため、「興田」が大字名として地名に残らなかった!

行政区名にも「沖田」「下沖田」、「鳥海」「中川(上・下)」のほか、「天狗田(下)」が存在。

すでに合併を経験し、大字を持っている興田村と渋民村の場合、大原などと揃えようとする「大東町興田字沖田八日町」や「大東町渋民字渋民伊勢堂」のように、かなり「くだい」住所になってしまうものね。

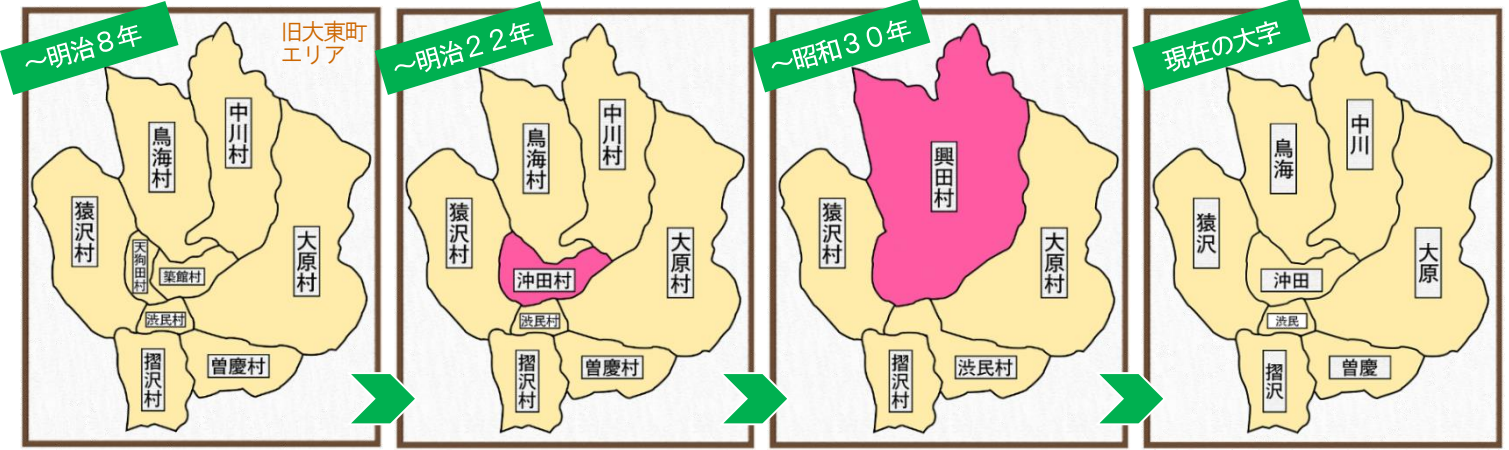
「興田村」は当初「海川田村」という村名になる予定だったけど(1日だけだったという説も)、結果的に「興田保」に由来する「興田村」にしたんだって!

ミッション 79 地名の謎 ファイルNo.8 「興田と沖田」

大東町の「おきた」という地名を聞くと「興田」という漢字を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。しかし、実は「興田」という地名は現在は存在せず、地名として存在するのは「沖田」です。当地域における「大字」の多くは昭和の大合併直前に存在した村名であり、大東町の誕生前の村名は「興田村」だったので、大字名として「興田」が残っていると思われがちです。なぜ「興田」が地名として残らなかったのか、その経緯を調査しました。 ※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

「おきた」という地名で「興田」という字を思い浮かべる背景には「興田小学校」「興田中学校(令和5年3月で閉校)」など、公共機関に「興田」という字が使われていることがあるのではないのでしょうか。この時の「興田」は明治22年、昭和30年3月まで存在した「興田村」の名残であり、「大東町」に合併する直前の旧村エリアを指します。大東町は興田村の他に、大原町、渋民村、猿沢村、摺沢町の2町3村の合併で昭和30年に誕生しましたが、この時に大原町・猿沢村・摺沢町は、各町村名が大字となりました。ところが渋民村と興田村に関しては、渋民村が渋民、曾慶の2大字に、興田村は中川・鳥海・沖田の3大字になったのです。ここで「興田」という地名は消滅します……。そもそも「興田村」は「中川村」「鳥海村」「沖田村」が合併してできた村ですが、「沖田村」は明治8年に「築館村」と「天狗田村」の合併によってできた、わずか14年間だけ存在した村です。たった14年間しか存在しなかった「沖田村」の「沖田」が残り、「興田」が消えたことへの単純な疑問が、今回の調査に至る経緯です。

歴史を辿ると、葛西氏の時代に「興田保」というものが存在し、中川・鳥海・築館・天狗田の4か村が当該エリアに当たります。ここで言う「保」は、「荘」や「郷」と並ぶ所領単位で、平泉藤原氏によって開拓されたのだとか。文治5年(1128)には「奥州5郡2保」として葛西三郎清重に与えられます。つまり「興田」という地名は、12世紀には存在し、「興田庄(保)築館村」のように、各村に冠して使われていたようなのです。起源こそ分らないものの、当該地域において「興田」は古くから馴染みのある地名と言えます。ではなぜ、歴史ある「興田」が地名(住所)として残らなかったのか? 調査を進めると、明治に入り様々な法整備の中で、地方自治のために致し方なく合併が繰り返された経過があり、過去の合併歴が影響したのではないかと思われる展開に(もっと深い背景があるかと思いましたが……)。地名表記上は「興田」を失くさざるを得なかったものの(その詳細は左頁)、「興田村」や「興田保」時代に培った基盤が多々あることから、現在も「興田」は、旧4か村の総称として用いられ続けています。



▲村域はこの通りではないと思われるが、少なくとも江戸期には9村が存在。 ▲「地租改正法」交付の関係で、築館村と天狗田村が合併し「沖田村」誕生。 ▲「市制・町村制」の施行により、「興田村」と「渋民村」が誕生。 ▲「大東町」への合併と「一関市」の誕生を経た、現在の「大字」。